

# ほっ。とエピソード vol.5



## ～ある職場の、本当の話～

前回ご紹介したA社さんのエピソード【後編】です。今回は、あるきっかけでミャンマーに学校を建設された時のエピソードをご紹介します。

### ～後編～

A社さんの経営する焼き鳥店で、アルバイトとしてお勤めされていた留学生のKさん。彼は素直で一生懸命お仕事をし、素敵な笑顔と人柄で、お客様からも仲間からも愛されていました。

Kさんの故郷は、ミャンマーのインザラプの例会で、ミャンマーの平均寿命が短いのは飲料水に問題があるからではないか？という発表を行いました。インザラプでは、飲み水をため池から汲んでいました。しかも、それは泥水。上澄みをすくって飲むそうです。その話を聞いたロータリークラブで、Kさんの故郷に井戸を掘ろうということになりました。現地への視察が企画されました。それを聞いた社長は、その視察に家族で同行することにしました。いつも一生懸命に働いてくれるKさんの故郷を見たい！そう考えたのです。

飛行機を乗り継ぎ、空港からコンゴ車で移動。橋のない川をわたり、道なき道をすすみ、ようやく村に着きました。

した。村の人々は、ものめずらしそうに社長たちを見ていました。近寄ると散らばって、固まって視線を合わせてくれません。恥ずかしがり屋さんな人々です。一行は、ため池の視察に向かいました。ため池は、村の小・中学校の裏手にありました。本当に泥水でした。しかし、池よりも驚いたのは学校の建物です。小学校はトタン張りで、なんとか建物の形をしています。しかし中学校は…屋根だけです。雨が降ったら授業はできません。なんと、予算の関係で打ち切られ、そのまま放置された状態だったのです。

その後、村の人たちと話をしました。「井戸よりも、学校を建ててほしい。協力してもらえませんか？」村人はそう語りました。この一言は、社長の心を揺さぶりました。あんな泥水を飲むことよりも、子供たちの教育を心から願っている。必要なのは「教育」なんだ…。しかし、今回の訪問は井戸を掘るための視察。急にお願いされてもすぐには返事できません。井戸の話を進めるといつまで、村をあとにしました。でも、社長の心には、村人の一言がひたかたたまましました。実は村に行く前、ミャンマーにある日本人戦没者慰霊碑を訪ねていました。それは、太

平洋戦争のビルマ(ミャンマー)の旧国名)で命を落とした日本人を祭ったものです。現地には、その慰霊碑を今でも大切に手入れしてくれているお坊さんがいました。日本人の慰霊碑を、戦争が終わって今も祭ってくれている。損得など関係なしに、ミャンマーの人々は、なんと気持ちが豊かなのだらう…。

調べているうちに、ミャンマーに学校を建てた日本人がいることを知りました。何とかしたい。私も何か動いてみれば、プラスになるんじゃないか？よし、やろう。社長は、学校を作るプロジェクトを立ち上げました。焼き鳥店には、募金箱が設置されました。仲間や知り合いにも設置してもらいました。現地で見積もりを取ったところ、六百万円ほど予算がかかるといわれました。しかし、村の人達が協力すると約束してくれたので、最終的には三百万円で建設ができることになりました。社長がはじめた善意の輪は、予想を超えた反響を呼び、マスコミなどにも取り上げられ、全国へと広がっていききました。最終的には、三百三十万円もの善意が寄せられ、二〇〇九年の秋、無事に完成を迎えました。皆で考えて付けた学校の名前は「ウタバラ」。一人類を守る」という意味です。開校式に

招かれた社長は、感動して思わず声を出してしまいました。そうです。恥ずかしがりやだなと思った村の人たちも、みんな笑顔でこちらを見ていました。「学校は、作って終わりにするだけでは意味がないですよ。学校には、これからも支援させて頂く考えです。そのため、引き続き募金活動などを行っています。現地で学んだ子供たちが、いつかいいな」

社長が経営されている焼き鳥店で、開校式の写真を見せていただくことができました。子供たちの鮮やかな笑顔と、それを彩る真っ青な空。この村はもうと明るく楽しくなっていく。そう予感させるエネルギーが、いっぱい溢れていました。



採用と教育  
(社員教育・経営支援事業)  
代表 半田 真仁

広島県出身。商事会社に在職中、日本キャリア開発協会認証のキャリアカウンセラー試験に合格、精神保健福祉士の資格も得た。2年間、福島県の若者自立相談員、就職サポートセンター特別職業相談員を務め、その後「採用と教育」を設立。組織活性化アドバイザーとして、多くの医療・福祉施設の活性化に携わっている。

◆URL <http://www.saiyoutokuyouku.com/>

